

会議名	日本畜産学会第 108 回大会(岡山大会)
開催日時	平成 19 年 9 月 26 日～27 日
開催場所	岡山大学津島キャンパス 一般教育棟
主催者	(社)日本畜産学会
参加人数(概数)	約 500 名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>今大会の演題数および会場数は栄養・飼料：58 題(23.3%)2 会場、育種・遺伝：42 題(16.9%)2 会場、形態・生理：51 題(20.4%)2 会場、繁殖・生殖工学：22 題(8.8%)1 会場、畜産物利用：43 題(17.2%)2 会場、管理・環境・畜産経営：33 題(13.2%)1 会場、合計 249 題 10 会場であった。</p> <p>26 日午前に行われた優秀発表賞には 17 題が応募し、村上要介(東大院農生命)、池上春香(和歌山産業振興財団)、及川大地(九大院農)および友永省三(九大院農)の 4 氏が受賞した。</p> <p>以下、報告者が出席した一般講演の中から、主として調査した栄養・飼料および生理分野の演題の主なものについて報告する。</p> <p>1)乾乳期間を短縮して、分娩後の栄養状態を改善する試みが行われている(27 - 07 および 26 - 10)。</p> <p>従来、分娩予定 60 日前に乾乳することが指導されてきた。この 60 日群と乾乳期間を短縮し分娩予定 30 日前に乾乳した 30 日群について分娩後の体重、飼料摂取量、乳生産、繁殖成績、血中代謝産物を比較した。この結果、分娩後の体重減少は分娩時体重を基準とすると 60 日群が大きかった。飼料摂取量および 16 週間の泌乳量では両区間に差が見られなかった。分娩後の初回排卵日数、子宮回復日数、初回発情日数、初回受精日数、空胎日数では 30 日群が短く、初回受胎率でも 30 日群の方が高い傾向にあったが有意な差ではなかった。分娩後 2 週目の NEFA 濃度は 60 日群に比べて 30 日群で有意に低かった。これらの結果から乾乳期間の短縮は周産期のエネルギー代謝を改善する可能性が示唆された。</p> <p>2)高温環境が高泌乳期の P、Ca および Mg 出納を低下させる傾向がある(27 - 06)。</p> <p>高温ストレスが高泌乳牛における P、Ca および Mg の動態および骨代謝への影響を検討した。その結果、高温環境下では P、Ca および Mg の摂取量が低下傾向を示し、吸収量は有意に低下した。また、乳中の P と Mg 濃度および分泌量も有意に低下した。骨代謝マーカーである血漿中オステオカルシンも高温環境下で有意に低下した。</p> <p>3)トリプトファン給与が子牛の成長関連ホルモンの分泌機能を活性化し、成長を促進する(27 - 13)。</p> <p>反芻家畜のアミノ酸代謝については、研究が少なく、アミノ酸要求量の設定まで至っていない。この課題では、トリプトファンを鎮静、ストレス緩和効果を持ち、成長ホルモンに關与するセロトニンの前駆体としてあつかい、</p>

	<p>経口投与が成長ホルモンの分泌に影響するかどうか検討している。結果的には血漿中の成長ホルモン、IGF-1、TSH 基濃度には影響を及ぼさなかったが、トリプトファン給与区が対照区に比べて体重、体高ともその増加量が大きく子牛の成長促進に關与する可能性が示唆された。</p>
<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>27-01 および 27-03 の課題ではそれぞれ試験飼料を泌乳牛およびホルスタイン種去勢牛に給与し、給与前と給与後の血液性状、乳質、第1胃液性状等を比較している。しかしこの実験では対照区が設定されておらず、測定値に変化があったとしてもそれが試験飼料によるものか牛の生理的变化によるものか判断できない。実験計画としては失格である。</p> <p>このような実験を 27-01 では畜草研が、また 27-03 では日獣大という畜産研究の中核ともいえる機関が実施していることは、各機関での予演会や若手に対する指導、さらにその発表に対して意見を述べない座長や畜産学会のレベルの低さを物語っている。早急に対応すべきである。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>特になし、</p>
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>特になし</p>
<p>5 . 会議の所感</p>	<p>栄養飼料関係の会場と比較的分野の近い生理関係の会場が遠すぎた。プログラムの組み方に適切でない部分があり、一考を要する。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>